
大学生用性格検査の作成の試み

Construction of Personality Inventory for Contemporary College Students

西澤晴香 倉石百合子 寺嶋繁典

関西大学大学院心理学研究科

Haruka NISHIZAWA, Yuriko KURAISHI and Shigenori TERASHIMA

Graduate School of Psychology, Kansai University

◆要約◆

近年、学生の性格特徴の変化が指摘され、先行研究でも時代によって異なる特徴が報告されている。本研究は、現代学生の性格特徴を測定する質問紙を作成し、信頼性と妥当性を検討することを目的とした。教員、大学院生から、聞き取りによって現代の学生の性格特徴を示す項目を収集し、従来の性格検査に含まれる項目と合わせて質問紙を作成した。この質問紙を用いて大学生と大学院生を対象に調査し、探索的因子分析を行ったところ、Big Fiveと類似の因子構造を示した。しかし、各因子に負荷した項目は従来の質問紙には含まれない項目も多く、現代の学生の性格傾向を反映しているものと考えられる。これらの因子名は学生相談などでの使用を考慮し、学生になじみやすい名称を採用して「気にしやすさ」「活発さ」「臨機応変さ」「無責任さ」「おおらかさ」とした。各下位尺度のクロンバックの α 係数は.932～.737であり、内的整合的信頼性は概ね良好であることが示された。また、対人不安傾向尺度との相関から一定の基準関連的妥当性が示された。

キーワード：性格検査、尺度構成、大学生、因子分析

Abstract

The purpose of this research was to construct a personality inventory for college students. Numbers of researchers have created personality inventories, and they are widely accepted. However some inventories include terms which are not familiar among young people or are used in a different situation today. By collecting items from college students, we have constructed a new personality inventory which is comprised of terms in daily use. From the solution of the factor analysis we extracted five common factors and named them as Sensibility, Activeness, Resourcefulness, Irresponsibility, Tolerance. We constructed five scales from items which were loaded on each of the factors. The scales also showed Cronbach's alpha coefficients ranging from .73 to .93. Furthermore the inventory showed criterion-related validity with Social Anxiety Tendency scale. Overall, the result suggests that this personality inventory is a valid and reliable

scale.

Key Words: personality inventory, scale construction, college students, factor analysis

はじめに

日本学生相談学会特別委員会（2007）の「2006年度学生相談に関する調査報告」によると学内の相談機関への来談率は4.8%であり、10年前に比べて2.7%も上昇している。近年、大学進学率の上昇に伴って学生が多様化し、進学の目的や学力のばらつき、対人関係の未熟さ、および意欲の低下といった特徴を持つ学生の増加が指摘されている（加藤・綿井・吉原ら2010）。大学生の性格特性については、これまでに数多くの研究がなされており、又吉（2000）がエゴグラムを用いて大学生の性格パターンを分類したところ、男女共に「台形型」のエゴグラムパターンが全体の3割を占めることを示した。このパターンは「自己中心性」を示しており、社会や組織への順応性が低下しがちであるとして、若者を社会に送り出す教育機関としての大学の役割に警鐘を鳴らしている。また時代によっても特徴的とされる性格に変化がみられる。1958年から1992年まで特定の大学で学生の性格変化を検討した菅野・辻（1996）によると、1979年を境目として、1979年以降は服従的、依存的、消極的な方向、理性的ではない方向、および自我同一性に関して意識的に悩まなくなる方向に変化したとされる。また、藤村（2002）は、大学生の欲求が1985年と2001年でどのように変化しているかを、EPPS日本語版を用いて検討したところ、男女共に「人からの指示を受けたい」「人から期待されていることをしたい」という欲求が強くなっていると述べている。1980年代から2003年までの性格変化を検討した中村（2003）は、感情的な繊細さ、行動面における積極性のなさ、対人関係における消極性が増したことなどを主な特徴として挙げている。このように大学生といっても時代によって性格特徴に

変化がみられ、従来の性格検査が、現代の学生にも適用可能であるか、改めて検討する必要がある。

さて近年のパーソナリティ研究ではBig Fiveが注目されてきた。これはパーソナリティの特性論の一つで、主要な5つの特性因子によってパーソナリティを包括的に説明できるという考え方である。歴史的には、人間の行動における重要な個人差は言葉として表されるという明辞仮説に基づいて、特性語のリストを使用し、因子分析によって基本的な特性次元を見出す研究が行われた。R. B. Cattell（キャッテル）をはじめとして、1960年代のE. C. Tupes（テュープス）とR. E. Christal（クリスタル）や、W. T. Norman（ノーマン）ら、1980年代のL. R. Goldberg（ゴールドバーグ）などによって、5因子構造が繰り返し報告されてきた。

これらの研究を受けて本邦では、1990年代に入っていくつかの翻訳尺度の標準化や、日本の文化に適したBig Five尺度の標準化が行われた。形容詞項目によって簡便に性格特性の基本5次元を測定しようとする和田（1996）のBig Five尺度、Goldbergの5因子モデルを参考に日本人固有の性格特性を考慮して作成された辻らFFPQ研究会（1998）によるFFPQ、P. T. Costa（コスタ）とR. R. Macrae（マクレレー）のNEO-PI-Rを翻訳した下仲・中里・権藤ら（1998）の日本版NEO-PI-R、Goldbergの5因子モデルを前提とした村上・村上（1997）などがある。

中でも和田（1996）のBig Five尺度は、形容詞項目によって簡便に基本5次元を測定しようとする尺度である。形容詞尺度は5因子構造を安定的に抽出しやすく、比較的少ない項目数で短時間に検査を実施できるなどの利点を有しており、本尺度を用いた応用研究が数多く行われ

ている。また、和田（1996）の Big Five 尺度は、大学生を対象に尺度構成を行っており、大学生の性格特性を捉える質問紙として適している。しかし、項目選定に際して1974年版の『個性表現辞典』を参考としており、現代の学生にはわかりづらい表現や、項目内容のとらえ方が当時とは異なっているものも含まれているように思える。萩生田（2010）は、和田（1996）の Big Five 尺度の内の 20 項目について、調査年次による因子構造の差異を検討したところ、年次によって負荷量の低い項目として「意思表示をしない」「素直な」「進歩的」「洞察力のある」を挙げている。また、この研究では、Big Five 尺度の中で普段使用しない言葉について調査したところ、10%以上の人々が「独創的な」「外向的な」「進歩的」「無節操」を使用しないと回答している。大学生の性格特徴を把握するためには、彼らが日常的に使用する表現を取り入れた性格に関する質問紙を構成する必要がある。本研究の目的は、現代の大学生の性格特徴を測定する質問紙の作成であり、学生相談や教育相談の場面で役立てたいと考えている。

方法

1. 調査対象

私立大学に通う大学生と大学院生 97 名（男性 29 名、女性 65 名、性別未記入 3 名、平均年齢 21.1 歳、SD2.4）を対象に質問紙調査を集団で実施した。

2. 尺度構成

教員・大学院生を対象に「最近の大学生にみられる性格特徴」を聴取し、収集された 86 項目の内から、個人の性格特性とは関係がないと考えられる項目や、意味内容の重複している項目を削除し、KJ 法により以下（table 1）の 30 項目を収集した。

また Big Five などの性格検査からも項目を収集し、先の項目を合わせて 90 項目を性格特徴を表す項目とした。さらに本尺度の基準関連の妥当性を検討するために、対人不安傾向尺度 18 項目を加え、全 108 項目から構成される質問紙を作成した。なお、対人不安傾向尺度は、松尾・新井（1998）によって作成されたものであり、「対人的場面に遭遇したり、あるいはそれを予測したりすることによって起こる個人の不安反応」

table 1 収集によって加えた項目

頑張っても無駄だと思う	オーバーリアクションだ
ネット上の友達がいる	キャバが小さい
打たれ弱い	冒険心がない
好きなことにしか興味がない	どうなるか考えてから行動する
人から感謝されたいと思う	空気が読める
人の意見に流されやすい	他力本願な
目的意識がある	社会に出たくない
浮いていると感じることがある	現実逃避する
そつなくこなす	人目を気にする
流行りものが好き	自分と向き合わない
自分から率先して動く	真面目な
将来のことはあまり考えない	遠回しに自分の意見を主張する
優柔不断な	社会を知らない
マナーを守る	心が折れやすい
依存的な	行き当たりばったり

を測定している。「否定的評価懸念」「情動的反応性」「対人関与の苦痛」の3下位尺度からなり、「否定的評価懸念」は対人場面において否定的な評価を受けることを懸念する傾向を、「情動的反応性」は対人場面において生理的反応を含む情動を喚起しやすい傾向を、「対人関与の苦痛」は人と関わることへの苦痛を感じる傾向を示す。「情動的反応性」「対人関与の苦痛」はBig Five 性格検査の「情緒不安定性」や「外向性」との関連がみられると考えられる。

3. 調査実施手続き

無記名の質問紙調査を集団で実施し、直後に回収した。その際、調査の趣旨を説明し、質問紙の回答は任意であること、個人情報保護されること、データは統計的に処理されることを紙面および口頭で説明して、研究への協力についての同意を得た。

4. 分析方法

性格に関する90項目について以下の手続きにより項目分析を行った。各項目の天井効果およびフロアー効果を調査し、両効果のみられる項目がないことを確認した。次に主成分分析を行い、スクリーグラフの結果を参考に5つの主成分を抽出し、いずれの主成分に対しても負荷量の低い項目（.40以下）を除外した。残りの69項目に対して主因子法ならびにプロマックス回転による因子分析を適用し、因子構造を明らかにした。抽出した因子に負荷した54項目（.47以上）を下位尺度の項目として、各々のクロンバックの α 係数を算出し、尺度の内的整合的信頼性を検討した。また、本尺度の基準関連の妥当性を検討するために、下位尺度と対人不安傾向尺度との相関を求めた。また各下位尺度の標準偏差に基づいて高得点群と低得点群に区分し、両群の対人不安傾向尺度得点の差異について検討した。なお、統計解析にはSPSS for Windows (Ver.19.0j)を使用した。

結果

1. 下位尺度の構成

項目分析を経て最終的に選定された54項目への因子分析の結果はtable 2に示すとおりであり、各因子への負荷量の高いものから順に掲載した。太字は本尺度において、今回の聞き取り調査により新たに採用した項目である。

因子に負荷した項目をみると、第1因子には「心が折れやすい」「人目を気にする」などが負荷し、評価されることに関する因子と考えられ、「気にしやすさ」と命名した。第2因子には「社交的な」「積極的な」などの項目が負荷し、活動性に関する因子と考えられ、「活発さ」と命名した。第3因子には「そつなくこなす」「想像力に富んだ」などの項目が負荷し、状況への対処に関する因子と考えられ、「臨機応変さ」と命名した。第4因子には「行き当たりばったり」「いい加減な」などの項目が負荷し、計画性の乏しさに関する因子と考えられるため、「無責任さ」と命名した。第5因子は「温和な」「寛大な」などの項目が負荷し、寛容さに関する因子と考えられ、「おおらかさ」と命名した。なお、以上の因子名は学生相談などでの使用を考慮し、大学生になじみやすい名称を採用した。

2. 内的整合的信頼性の検討

各下位尺度の内的整合的信頼性を検討するために、クロンバックの α 係数を算出したところ、「気にしやすさ」は.932、「活発さ」は.910、「臨機応変さ」は.847、「無責任さ」は.805、「おおらかさ」は.737であり、概ね良好な数値を示した。

3. 基準関連の妥当性の検討

本尺度の基準関連の妥当性を検討するために、対人不安傾向尺度との関連を調査した。尺度得点間の相関はtable 3に示すとおりである。また、各尺度の高得点群と低得点群における、対人不安傾向尺度の平均点の差はtable 4に示

table 2 因子分析結果

項目	I	II	III	IV	V
第1因子：気にしやすさ (α 係数 = .932)					
83 不安になりやすい	.838				
14 傷つきやすい	.835				
38 心配性	.781				
71 弱気になる	.745				
90 心が折れやすい	.737				
53 悲観的な	.725				
13 打たれ弱い	.702				
68 人目を気にする	.675				
76 悩みがち	.661				
39 緊張しやすい	.654				
59 依存的な	.646				
28 動揺しやすい	.639				
30 憂鬱な	.578				
89 くよくよしない (*)	.568				
54 キャパが小さい	.559				
55 冒険心がない	.545				
16 人から感謝されたいと思う	.511				
49 優柔不断な	.497				
第2因子：活発さ (α 係数 = .910)					
06 外向的		.887			
72 無口な (*)		.817			
37 社交的		.755			
45 陽気な		.712			
01 話し好き		.700			
08 積極的な		.687			
34 暗い (*)		.659			
64 無愛想な (*)		.621			
50 活動的な		.608			
23 地味な (*)		.573			
17 人嫌い (*)		.562			
41 意志表示しない (*)		.550			
52 オーバーリアクションだ		.534			
46 自分から率先して動く		.459			
第3因子：臨機応変さ (α 係数 = .847)					
79 頭の回転が速い			.744		
35 そつなくこなす			.726		
81 呑み込みの速い			.698		
10 多才の			.662		
80 想像力に富んだ			.626		
22 独創的な			.565		
33 臨機応変な			.542		
75 興味の広い			.435		
第4因子：無責任さ (α 係数 = .805)					
78 行き当たりばったり				.737	
87 成り行きまかせな				.719	
88 怠惰な				.715	
73 いい加減な				.591	
74 軽率な				.584	
26 飽きっぽい				.417	
61 他力本願な				.398	
11 不精な				.396	
65 現実逃避する				.345	
第5因子：おおらかさ (α 係数 = .737)					
84 温和な					.746
36 親切的な					.734
56 寛大な					.715
02 良心的な					.565
44 怒りっぽい (*)					.421
寄与率 (%)	21.396	11.655	6.702	6.238	4.563
累積寄与率 (%)	21.396	33.050	39.752	45.991	50.553
因子相関行列	1.000				
	-.248	1.000			
	-.203	.315	1.000		
	.362	.004	-.026	1.000	
	-.105	.133	.108	-.159	1.000

因子抽出法：主因子法回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

太字は収集によって加えた項目

(*)は逆転項目

table 3 尺度得点間相関

	気にしやすさ	活発さ	臨機応変さ	無責任さ	おおらかさ	否定的評価懸念	情動的反応性	対人関与の苦痛
気にしやすさ								
活発さ	-.292**							
臨機応変さ	-.320**	.321**						
無責任さ	.439**	-.105	-.153					
おおらかさ	-.079	.097	.086	-.245*				
否定的評価懸念	.611**	-.505**	-.182	.484**	-.052			
情動的反応性	.619**	-.519**	-.191	.482**	-.068	.991**		
対人関与の苦痛	.329**	-.627**	-.194	.349**	-.212*	.634**	.647**	

*p<.05 **p<.01

table 4 各尺度の高得点群・低得点群の対人不安傾向尺度の平均点の差

	否定的評価懸念				情動的反応性				対人関与の苦痛				尺度合計得点			
	H		L		H		L		H		L		H		L	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
気にしやすさ	53.9	11.6	34.0	5.7**	36.0	7.2	22.8	3.5**	7.3	2.4	5.3	1.5**	97.4	20.5	62.1	9.8**
活発さ	36.3	8.6	50.9	13.5**	24.4	5.6	34.0	8.6**	4.3	1.3	8.0	2.3**	65.0	14.6	92.8	23.6**
臨機応変さ	44.2	10.1	47.0	16.1	29.2	6.2	31.2	9.9	5.6	1.9	6.8	2.8	79.0	17.8	85.0	28.0
無責任さ	54.5	8.8	35.2	8.1**	35.8	6.0	23.7	5.0**	7.4	2.3	5.1	1.5*	97.7	16.7	64.0	14.1**
おおらかさ	40.5	12.2	42.9	10.1	26.8	7.7	28.8	6.6	5.3	2.2	6.6	2.4	72.6	21.3	78.3	18.1

*p<.05 **p<.01

した。

「気にしやすさ」の両群における「否定的評価懸念」「情動的反応性」「対人関与の苦痛」の平均点を比較したところ、すべての尺度で両群に有意差がみられた。「活発さ」でもすべての尺度で、両群に有意差がみられた。「臨機応変さ」では、どの尺度にも有意差はみられなかった。「無責任さ」ではすべての尺度で、両群に有意差がみられた。「おおらかさ」は「対人関与の苦痛」との相関が見られたものの、どの尺度にも差はみられなかった。

考察

1. 聞き取り調査からみた大学生の性格特徴

教員や大学院生から聴取した最近の大学生にみられる性格特徴では、「上下関係をあまり意識

しない」「流されやすい」「空気を読める」「人目を気にする」など、対人関係に関する表現が多くみられた。現代の大学生は、他人からの評価を気にして自分の価値観を見いだせなかったり、主張をしない傾向にあると考えられる。これは他人との対立を避け人間関係を損なわないようにする方略の一つかもしれない。洞澤（2011）は大学1年生と2年生を対象に、ほかし言葉である「～かな、みたいな」と「～って感じ」について語用論的機能を検討している。この研究によると、「～かな、みたいな」「～って感じ」を用いて当該の事象を第三者の発言として間接引用することで、発話者と事象との間に距離ができ、聞き手への衝撃を和らげており、若者は「ほかし言葉」の緩衝機能をうまく使用していると報告している。また文化庁による国語に関する世論調査の結果を平成11年度と16年度で比

較すると、若年層の「ぼかし言葉」の使用に増加傾向がみられる。このように、今回の調査でみられた、他人の評価を気にして対立を避けようとする傾向は、「ぼかし言葉」の調査にもあらわれている。現代の学生は物事の断定を避け、自分の意思を譲歩的な言葉で述べることによって、自分の意見を率直に表現しない傾向が強まっている可能性が示唆される。

2. 大学生の性格特徴を測定する尺度の構成

大学生の性格特徴を測定する尺度の構成を目的に、聞き取り調査や従来の性格検査から収集した項目に探索的因子分析を適用したところ、Big Five と類似の因子構造を示した。しかし、各因子に負荷した項目は従来の項目と異なるものも多く、これらが現代の大学生の性格傾向を反映している可能性がある。

例えば、第1因子の「気にしやすさ」では、Big Five の該当尺度にあった「気苦労の多い」と「神経質な」の2項目が除外され、「心が折れやすい」「打たれ弱い」「依存的な」「人目を気にする」「優柔不断な」「キャパが小さい」「冒険心がない」「人から感謝されたいと思う」の8項目が新たに追加された。これらの項目からみて、現代の学生は自らの主体性によるよりも、他人の評価を基準に行動する傾向が認められ、対人関係における過敏さが社会不安障害（SAD：social anxiety disorder）の増加の背景に存在することが考えられる。社会不安障害は「恥ずかしい思いをするかもしれない社会的状況または行為状況に対する顕著で持続的な恐怖」と特徴づけられる疾患であり（DSM-IV 2000）、不安障害の中では最も有病率の高いことが指摘されている（城月・野村 2009）。溝上（2001）は大学生の自己評価を規定する要因として、対人関係が大きな位置を占め、対人関係の取り方が未熟なため、自己を評価できず、そのために情緒不安定になりやすいことを示唆している。

第2因子の「活発さ」では Big Five の項目は除外されず、「オーバーアクションだ」「自分

から率先して動く」の2項目が追加されただけであり、活動性に関しては安定した因子と考えられる。ただし、「オーバーアクションだ」については、多義的に捉えられる可能性があり、今後、検討の余地があろう。

第3因子の「臨機応変さ」では Big Five の「進歩的」「洞察力のある」「好奇心が強い」「美的感覚の鋭い」「独立した」が除外され、「そつなくこなす」の1項目が追加された。これらの項目は、他人からの非難や批判をことさら回避して、物事を無難に処理する傾向を示しており、先の「ぼかし言葉」の調査結果と同様の傾向を反映していると考えられる。

第4因子の「無責任さ」では、同様に「ルーズな」「無頓着な」「勤勉な」「計画性のある」「几帳面な」が除外され、「行き当たりばったり」「他力本願な」「現実逃避する」の3項目が追加された。これらの項目から、困難な場面では場当たりの行動を示したり、逃避的な態度を示す傾向が伺える。

第5因子「おおらかさ」では、「短気」「かんしゃくもち」「反抗的」「とげがある」「自己中心的」「無節操」「協力的な」「素直な」が除外されたが、新たに追加される項目は無かった。

以上の追加項目の性質からみて、現代の大学生にみられやすい対人関係に敏感で評価を気にし、対立することをことさら避けたり、場当たりの行動様式を示しやすいなどの傾向が、本尺度から測定されやすくなったと考えられる。

なお今回の調査で Big Five から除外された「気苦労の多い」「進歩的」「無節操」は学生の日常語としてあまり使用されない表現であり、また「かんしゃくもち」「独立した」なども Big Five の作成当時とは意味内容が異なることから除外されたと考えられる。一方、「心が折れやすい」「打たれ弱い」「キャパが小さい」など、今回、追加された多くの項目は、学生にとってなじみ深い表現である。村上（2003）は心理測定の必要条件の一つとして、用語の熟知度と使用頻度が高いことを挙げている。質問紙の作成に

あたり、被検者、すなわち学生にとって意味がわかりやすく、日常的に使用されている表現を用いるのが望ましいと考えられる。

3. 本尺度の信頼性と妥当性

①尺度の信頼性

「気にしやすさ」「活発さ」「臨機応変さ」「無責任さ」の4つの下位尺度の α 係数を算出したところ、3尺度は.80以上と高い数値を示し、内的整合的信頼性は良好であった。ただ「おおらかさ」の尺度は.737とやや低かった。これは、本尺度を構成している項目の数が少なく、今後項目の追加を検討する必要がある、また再検査信頼性などの検証も行わなければならない。

②尺度の妥当性

作成した下位尺度と対人不安傾向尺度との関係から、基準関連の妥当性について検討した。この結果「気にしやすさ」尺度は対人不安傾向尺度の「否定的評価懸念」「情動的反応性」「対人関与の苦痛」との相関がみられた。本尺度の主要な項目である「人目を気にする」「人から感謝されたいと思う」「心配性」「緊張しやすい」「動揺しやすい」などの傾向を有する者は、当然のことながら他人からの評価に敏感で、対人場面で緊張や不安が高まりやすく、結果的に他人とのかわりを避けやすいと考えられる。このことから本下位尺度は対人不安傾向尺度と正の相関を示し、同時に高得点群の値が有意に高かったと考えられる。

「活発さ」尺度は、対人不安傾向尺度の「否定的評価懸念」「情動的反応性」「対人関与の苦痛」のいずれとも負の相関を示した。本尺度の項目である「外交的」「社交的」「陽気な」などの傾向を有する者は、他人の評価をあまり気にせず、対人場面でも安定した行動を示しがちで、結果的に対人場面を回避する傾向が少ないと考えられる。このことから本下位尺度は対人不安傾向尺度と負の相関を示し、同時に高得点群の値が有意に低かったと考えられる。

「無責任さ」尺度は、対人不安傾向尺度の「否

定的評価懸念」「情動的反応性」「対人関与の苦痛」のいずれとも正の相関を示した。本尺度の項目である「行き当たりばったり」「いい加減な」など、責任を負うことを避ける傾向の者は、他人から悪い評価をされるのではないかと不安になり、社会的場面で情緒不安定になりやすく、結果的に対人場面を回避しやすいと考えられる。このことから本下位尺度は対人不安傾向尺度と正の相関を示し、同時に高得点群の値が有意に高かったと考えられる。

「おおらかさ」尺度は、対人不安傾向尺度の「対人関与の苦痛」と負の相関を示した。本尺度の項目である「温和な」「親切な」「寛大な」傾向の者は良好な対人関係を構築しやすく、社会的場面を避けることが少ないために、「対人関与の苦痛」尺度と負の相関を示したと考えられる。

なお「臨機応変さ」尺度は、対人不安傾向尺度のいずれの下位尺度とも有意な相関関係を示さなかった。本尺度の項目である「頭の回転が速い」「多才の」「想像力に富んだ」などの特徴は、知的活動性と関連し、対人場面の不安とはあまり関連しないと考えられ、両尺度に有意な相関が認められなかったと考えられる。本尺度の基準関連の妥当性に関しては他の尺度を用いてさらに検討する必要がある。

以上、作成した5つの下位尺度の基準関連の妥当性を検討したところ、「臨機応変さ」の尺度以外は、良好な値を示した。なお今後、本尺度の実際の妥当性などについても検討する必要がある。

4. 今後の課題・展望

本研究において、尺度の内的整合的信頼性や基準関連の妥当性については検討したものの、再検査信頼性や実際の妥当性については今後の課題として残されている。また、被検者も十分な数とは言えず、被検者を増やすことで、さらに安定した因子構造を見いだす必要がある。しかし本研究では、現在の学生気質を反映する貴重な項目を収集することができ、従来の性格検

査では測定できにくい現代の学生の特徴を把握するための尺度の開発について、一定の見通しをつけることができたと考えている。

文 献

- American Psychiatric Association: *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 4th ed.* Text Revision. APA, Washington DC (2000). 高橋三郎、大野裕、染谷俊幸(訳)(2002):『DSM-IV-TR 精神疾患の診断 統計マニュアル』医学書院。
- 文化庁(2000):平成11年度国語に関する世論調査の結果 独立行政法人国立印刷局。
- 文化庁(2005):平成16年度国語に関する世論調査の結果 独立行政法人国立印刷局。
- FFPQ研究会(1998):『FFPQ(5因子性格検査)』北大路書房。
- 藤村邦博(2002):大学生の欲求はどのように変わったか『大阪人間科学大学紀要』1:87-89。
- 洞澤伸(2011):若者たちが使用する「ほかし言葉」“～かな、みたいな”と“～って感じ”の語用論的機能『岐阜大学地域科学部研究報告』28:41-49。
- 菅野信夫、辻齊(1996):京大入学者の性格の35年間の変容(Ⅲ)——一般学生(非来談者)の経年変化——『日本心理学会』77。
- 加藤陽子、綿井雅康、吉原啓、岡村佳子、菅野純(2010):大学における不登校とその対応:不適応学生への予防的アプローチ『日本教育心理学会総会発表論文集』(52):126-127。
- 又吉光邦(2000):エゴグラムに見るO大学S学部の学生像『商経論集』28(2):25-37。
- 又吉光邦(2002):エゴグラムに見るO大学S学部の学生像—1999～2001『商経論集』31(1):1-10。
- 松尾直博、新井邦二郎(1998):児童の対人不安傾向と公的自己意識、対人的自己効力感との関係『教育心理学研究』46(1):21-30。
- 溝上慎一(2001):『大学生の自己と生き方』ナカニシヤ出版。
- 村上宣寛、村上千恵子(1997):主要5因子性格検査の尺度構成『性格心理学研究』6(1):29-39。
- 村上宣寛(2003):日本語におけるビッグ・ファイブとその心理測定的条件『性格心理学研究』11(2):70-85。
- 中村晃(2003):大学生の性格における年代的变化『千葉商大紀要』41(3):1-19。
- 日本学生相談学会特別委員会(2007):2006年度学生相談機関に関する調査報告『学生相談研究』27:63-74。
- 萩生田伸子(2010):調査年次によるBig Fiveモデル因子構造の差異の予備的検討『埼玉大学紀要 教育学部』59(1):171-177。
- 城月健太郎、野村恩(2009):Socialcost/Probability Scaleの開発『心身医学』49(2):143-152。
- 下仲順子、中里克治、権藤恭之、高山緑(1998):日本版Neo-PI-Rの作成をその因子的妥当性の検討『性格心理学研究』6(2):138-147。
- 辻平治郎(2001):日本語での語彙アプローチによるパーソナリティ特性次元の分析『平成10, 11, 12年度科学研究補助金(基盤C)研究成果報告書(課題番号10610151)』。
- 和田さゆり(1996):性格特性用語を用いたBig Five尺度の作成『心理学研究』67:61-67。